

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER NO. 15

Japanese Society of Social Welfare Education

事務局 〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1 国際医療福祉大学 小嶋研究室気付

TEL 0287-24-3067 E-mail jsswe.bu@gmail.com <http://kenkyuukai.jp/about/>

2012年10月30日発行

1. 巻頭言

社会福祉教育の実感

理事 川上 富雄 (駒澤大学)

私は、社協での現場経験を経たのち、1999年から実習講師として福祉系大学の教員生活をスタートしたが、そこで直面したのが社会福祉士養成における講義・演習内容と実習内容の乖離・矛盾の問題だった。

よくいわれるソーシャルワークとケアワークの乖離問題である。以来、様々なプロジェクトに関わらせていただき、実習のあり方を中心とした養成教育問題は、半ばライフワークのようになってもいる。

そんな教員生活の中で、何となくこの頃感じることは、実際の福祉現場は「人間性」や「経験性」や「実務性」を大切にしているのに、社会福祉士養成教育はそこに巧く乗れていないのかな……ということである。この噛み合わなさが学生募集（不人気さ）にも影響しているかもしれないなど感じている。学生の人間力を磨きあげ、魅力ある現場人なりソーシャルワーカーとして自信をもって送り出せているのだろうか。有資格者としてスタートする時点で現場が要求する最低限の経験を持たせて送り出せているのだろうか。実務に役立つ具体的な知識を持たせて送り出せているのだろうか、と自問する今日この頃だ。

知識一つ取り上げても、様々な福祉制度利用や相談の窓口、家族・生活像と生活保護や年金給付額、障害等級の中身や障害年金額、要介護度と利用上限やサービス内容、様々なアセスメントシートが存在や特徴……実務者には当然の常識であることが養成教育の中できちんと伝えられていない。就中、福祉系教員自身もそもそも知らない……ということはないだろうか。だから、我々も送り出す学生に「現場に出てからの経験が大事」と逃げるしかないのではないかと考えたりもする。

かくいう私自身、父親が難病を患って初めて公費助成制度を調べ、手続を行ったし、介護保険制度の利用手続やケアマネとの遣り取りを行った。父親の他界以降、独居となった母親が幾らの年金と幾らの貯蓄で老後生活を送ることになるのかも知った。それまで、人に福祉を教えていながら、身内の老後生活への想像力さえ欠如していたのだ。「福祉の専門家」という幻想を抱いているためか、友人から「最近、親父の奇行・暴言が増えたのだが何処に相談に行けば良い?」、近隣から「事故で右手の薬指と小指を失ったのだが障害年金は幾らくらい貰える?何処に行けば良い?」などといった照会・相談が屢々舞い込む。(☞ p.2 へ続く)

目 次

1. 巻頭言	1	5. 2012年度総会報告	10
2. 第8回大会開催される	2	6. 学会探訪④ ~日本福祉のまちづくり学会~	17
3. 社会福祉士の教育課程の検討を開始	6	7. 会員の声 ~私の福祉教育~	19
4. 2012年度第2回理事会報告	9	8. 学会誌投稿募集・編集後記	20

実は、私は、相談を受けた時点でこうした具体的・実務的な知識は殆ど持っておらず、調べてから教えるしかない訳である。そんな経験をする度に、「自分は一体何を勉強していたんだろう」と情けない思いになる。わかったような、わからないようなことを、そのまま自分が教えているのだろうと思う。

資格制度導入以降、社会福祉学教育が、国家試験受験を目的とした記問之学になってしまい、制度的な知識や観念的なものに養成教育が傾倒していると思うが、その内容が現場実践に求められるものと今一つ噛み合っていないような隔靴搔痒感を感じているのは私だけなのだろうか。「この教科書どおりに教えていて良いのだろうか、自分の生活とは切り離された、特別不幸な身の上の人々に手をさしのべる福祉を教えてしまっているのではないか・・・」と不安になる。教科書に書いてある通りに、価値論や制度論から福祉を説き起こしているの？現実・実態からじゃないの？という疑問に屢々襲われる。学問的出発点を見誤っているような不安をいつも抱えている。

話はやや逸れるが、前職の大学で、中山間地や離島の社協に協力いただき、限界集落の空き家に学生を泊まらせ、自炊生活を送りながらフィールドワークを行い、地域アセスメントや個人アセスメントに取り組むという「地域総合型実習」なるものを行っていた。二層式洗濯機の使い方がわからない、集落住民からいただいた魚の調理法がわからない、掃除ができない・・・という学生たちが、試行錯誤を繰り返しながら生活感覚を身につけていく過程がとても楽しかった。

人のニーズを感得するためには人間の生活に対するイメージーションがそもそも必要だと思う。そのイメージーション力を高めるためには、自分自身に生活感覚なり生活者実感が必要なのだろうとも思う。そうした力を身につけてもらえるような教育をしたいと常々考えている。

卒業時に「結局のところ何を学んで、どんな力が付いたのかわからない・・・」と学生から言われられないような、実体のある、地に足の付いた教育をしたいと願い考え努力している。

2. 2012年度 第8回大会 東京にて開催される

大会テーマ：社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)

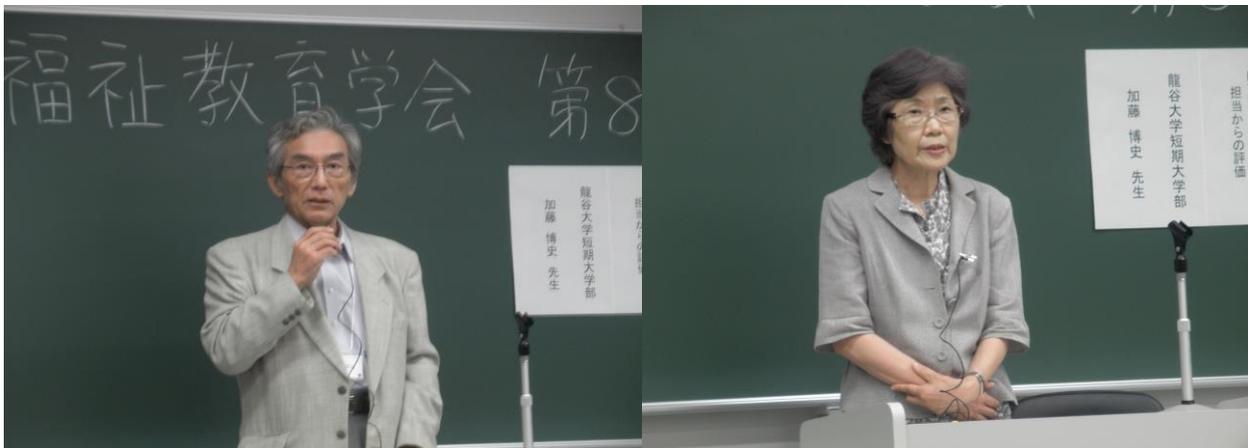
－完成年次を迎えてどのように評価するのか－

2012年8月25日(土)～26日(日) 立正大学 大崎校舎

第8回大会が、上記の日程・会場で開催されました。

会場をご提供いただいた立正大学の「開校140周年記念」ということで、同大学から物心両面のご協力を賜り、予定されていたプログラムは円滑に実施され、有意義な研究交流の機会となりました。

今回の大会テーマは(1)として設定されましたので、今後も引き続き、当学会において検証を進めていくこととなります。



学会長挨拶・川廷宗之会長

開催校挨拶・石井富美子立正大学副学長

大会プログラム

【1日目】 8月25日(土)

ワークショップ1 「実習教授法について」 講師：川上富雄（駒澤大学文学部准教授）

ワークショップ2 「演習教授法について」 講師：杉野聖子（江戸川大学総合福祉専門学校専任教員）

開会式（学会長挨拶・開催校挨拶・オリエンテーション）

記念講演 「社会福祉士養成課程改正についての指定科目外担当からの評価—福祉の思想・目的論の専門教育のあり方—」 講師：加藤博史（龍谷大学短期大学部教授）

自由研究発表 11 演題

総会

ランプセッション（「社会福祉士養成課程の改正に関する学会員対象のアンケート調査報告」）

【2日目】 8月26日(日)

基調講演 「社会福祉士養成課程改正の経緯と現状」

講師：白澤政和（桜美林大学大学院老年学研究科教授）

シンポジウム

「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)—完成年次を迎えてどのように評価するのか—」

コーディネーター：小山 隆（同志社大学社会学部教授）

シンポジスト：高齢者福祉論の立場から 渡辺裕一（武蔵野大学人間科学部准教授）

障害者福祉論の立場から 綿 祐二（文京学院大学人間学部教授）

実習・演習教育の立場から 守本友美（皇學館大学社会福祉学部教授）

閉会式



オリエンテーション・保正友子実行委員長



記念講演・加藤博史先生

大会を振り返って

第8回大会実行委員長 保正友子(立正大学)

I. はじめに

日本社会福祉教育学会第8回大会「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)—完成年次を迎えてどのように評価するのか—」が、8月25日、26日に立正大学大崎校舎で開催されました。2日通して参加された方は延べ55名でした。

大会プログラムは、8月25日は午前中のワークショップから始まり、午後の加藤博史先生の記念講演「社会福祉士養成課程改正についての指定外科目担当からの評価」、11題の自由研究発表、総会、夜のランプセッションでの意見交換会が行われました。翌26日は、午前中の白澤政和先生の基調講演「社会福祉士養成課程改正の経緯と課題」を受けて、午後のシンポジウム「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)—完成年次を迎えてどのように評価するのか—」が行われました。

企画と事前準備及び大会運営に関わった立場から、本大会を振り返ってみたいと思います。

II. 大会を企画するにあたって工夫したこと

まず、本大会を企画するにあたり、四点の工夫を行いましたのでご報告します。

第一は、大会初日の午前中に、実習と演習教授法のワークショップを開催したことです。これまでの大会は講演・シンポジウム・自由研究発表が主なプログラム内容でしたが、やはり本学会ならではの教育方法について、相互に深める場があってもよいのではないかと考え設定しました。両方のワークショップともに6人ずつの参加者が集まり、議論が深まりました。

第二は、前年度に全会員対象の社会福祉士養成課程カリキュラム改正の評価について、郵送による紙面調査を実施し、その結果を学会誌上で報告し、大会当日に配布する抄録にも内容を掲載したうえで、ランプセッションで報告したことです。これにより、徐々に大会テーマを会員に浸透させるとともに、テーマに関する議論を行う機運を高めてきたといえます。

第三は、昨年度の大会に引き続き自由研究発表の抄録を1発表につき、4ページから6ページとしたことです。これにより、短い論文が掲載されているような存在感が出たといえるでしょう。また、それだけのボリュームの抄録を作成するには、結論まで表した研究成果がなければ難しいので、研究の質的担保にも結び付くと考えられます。

そして第四は、大会抄録とは別に、白澤先生の講演で使用する資料をコンパクトな資料集として編纂したことです。これにより、今後、その資料を活用したい場合にも対応できるという利点が生じました。

III. 事前準備について良かったこと・苦労したこと

次に事前準備について、良かったことと苦労したことを三点ずつ挙げます。

良かったことの第一は、講演や自由研究発表の原稿がスムーズに集まったことです。皆さん、締め切りよりも早めに原稿を提出してくださり、大変助かりました。

第二は、立正大学教員の実行委員スタッフ間での役割分担がうまくいき、ほとんど問題なく準備が進んだことです。

そして第三は、本大会が立正大学開学140周年記念事業の一環に位置づけられ、大学から10万円の補助金が出たことです。これにより、大会費用を大きく補填しました。

次に、苦労したことの第一は、郵便局で振込口座を作ることでした。昨今では、犯罪防止のため団体名での口座作成は大変難しくなっています。そのため、学会規約や必要書類を集め、会長からは2度に渡って提出書類に押印してもらいました。

第二は、当初は自由研究発表者からの参加申し込みが主で、事前申し込みが伸び悩んでいました。しかしながら、事前申し込み締め切り間際になっての駆け込みや、当日参加者が予想以上に多かったため、55名を確保することができてホッとした次第です。

そして第三は、発送に関する手違いが生じ、せっかく作成した大会ポスターが早めに会員に送付されず、大会直前になってしまったことです。これについては、綿密な事前の段取りが必要であることを感じました。

IV. 大会当日の運営について良かったこと・苦労したこと

そして、大会当日の運営について、良かったこと三点と苦労したこと二点を挙げます。

良かったことの第一は、参加者の方々が暑い中で体調を崩されることなく、無事に2日間を終えられたことです。両日とも特に暑い日であり、建物のなかには冷房がきいてはいえ、外部との気温差も激しいなかで、皆さん元気に参加して下さったことが一番良かったことといえるでしょう。

第二は、本大会が今後の学会において、教育評価を行ううえでの議論の出発点になったことです。講演やシンポジウムを通して、多くの方が知的刺激を受けて課題意識が触発された様子が、参加者のアンケート結果から伝わりました。

そして第三は、アルバイトの学生が頑張ってくれて、参加者から大変良い評価をいただいたことです。暑いなか、スーツを着て街角に立った学生や、受付や教室担当になった学生達の姿からは、大学での日常と異なる別の一面が見られて、心強い思いがしました。

一方、苦労したことの第一は、受付時よりも総会やランプセッションの人数が減少したことです。ランプセッションまでをプログラムとして大会参加費に含めたのですが、夜は別の予定がある方が多いようで、自

由研究発表が終わると帰る人が目立ちました。今後、検討の余地がある課題といえます。

そして第二は、夏休み期間中の土日に開催されたため、当日のコピーや印刷に困りました。コピーは近くのコンビニエンスストアにスタッフが走って行き、自由研究発表者の配布資料の印刷は、たまたま大学にいた教員の研究室のプリンターを借りました。やはり、前もってこのような準備が必要なことを痛感した次第です。

ともあれ、無事に2日間を終えることができました。参加された方々、関係者の方々に心からお礼申し上げます。来年度以降も、本大会で皆様が持ち寄った熱い情熱を引き継ぎつつ、議論が深まる大会になることを願っています。



基調講演・白澤政和先生

シンポジウム・左から守本・綿・渡辺・小山の各氏

大会参加者の声

ワークショップ2「演習教授法」に参加して

楳木博之（身延山大学）

平成24年8月25日（土）日本社会福祉教育学会第8回大会に参加しました。私は、その中で午前中に
行われたワークショップ2「演習教授法について」が特に印象に残りましたので、報告したいと思います。

このワークショップ、参加者は6名と少人数でしたが、その分、講師の杉野先生（江戸川大学総合福祉
専門学校）はじめ皆さんと議論しながら考えることのできる2時間となりました。

私自身、演習の授業は悩んでいる状況でしたので、一方的に話を聴くのではなく、他の参加者の方と話
ができたことは、私にとって学びが多くあったと感じています。「私だけが悩んでいるのではない」「この
ようなやり方もあるのだ」などと多くの気づきを得ることが出来ました。

私の具体的悩みは、大きく2つありました。一つ目は、グループワークを行うと参加する学生と参加し
ない学生に分かれてしまうこと。二つ目は、想定していた時間を超えてダラダラしてしまう、でした。

これらの悩みに対して、教員が小まめにグループに声かけを行うこと、想定した時間を超えてしまう場
合は、実際にかかった時間を教案に記録しておくようにすることを学ぶことができました。私自身、グル
ープへの参加がない学生がいても声かけをあまりしなかったり、想定した時間を超えても「仕方がない」
とあきらめていたような気がします。皆さんの話を聞きながら、「これではいけない。襟元を正さなくては」
と実感することが出来ました。

「演習は教員と学生が一緒に行うもの」になります。だからこそ演習教育の重要性、教員にとっては醍
醐味のある授業だと感じています。演習について、今回いろいろなことを考えることができました。これ
だけで終わりではなく、今後も演習を振り返り考える時間を作っていきたいと思っています。

このような機会をいただきまして本当にありがとうございました。

3. 社会福祉士の教育課程の検討を開始

会長 川廷宗之（大妻女子大学）

○社会福祉士養成の教育課程は10年単位で見直されてきた。

1988年4月から施行された社会福祉士制度の養成課程は、その10年後の1998年に小幅な改正を経て、20年後の2008年4月施行で大幅なカリキュラム改正が行われました。この新カリキュラムによる養成課程での卒業生は2012年3月に卒業し、現在新カリキュラム施行5年目に入っています。社会福祉士の養成が始まってから、25年たったわけですが、教育課程の改訂はほぼ10年単位で行われるのが慣例であること（文部科学省所管の学習指導要領は10年単位）を考えると、次の教育課程改訂は、2018年が想定されます。

勿論、教育課程の改正は定期的に行われるとは限りません。根拠法の改正に伴う場合もあり、一概に2018年ということは出来ないかもしれません。しかし、近年の10年というのは社会変化が著しく、例えば2020年代の福祉需要が現在の福祉需要とほとんど変わらないと考えるのは、非常に困難でしょう。とすれば、社会福祉専門職の養成教育を考える学会としては、然るべき準備をしていく必要があります。また、現行の教育課程の問題点も多々あると考える方も多いでしょうから、その意味でも改善や、改革を考えることは重要な課題です。

教育課程の改訂では、もし2018年を想定するなら準備期間などを考えると、改正内容の公表は遅くとも2017年の年度初めになると想定されます。とすれば、そのほぼ2年前位から検討が始まると考えると、2015年度中には新教育課程の検討が始まることが予想されます。

その意味では、教育課程全体に関心のある私たちは、できれば2014年には、遅くとも2015年には具体的な提案をまとめる必要があるでしょう。とすれば、来年度の2013年までには、それに向けた問題点の整理くらいは提示しておく必要があるでしょう。

○専門職養成の教育課程改訂の三つの視点

教育課程の研究には三つの側面があります。一つ目は教育目標の設定という問題です。二つ目は教えるべき内容をどう考えるのかということであり、三つ目はどう教える（教育方法・教授法）のかということです。

これらのうち、社会福祉士養成教育の目標については、2020年代の社会福祉需要への対応や国際的動向への目配りも必要でしょう。それらに関するアウトラインを踏まえたうえで、社会福祉士の目的や学習内容・活躍の場などを考えつつ、教育内容を整理していく必要があるでしょう。

こういうマクロな視点と同時に、クライアントが必要としている実践で何が必要なのかをしっかりと吟味する必要があります。ともすれば、サービス提供者側の『必要』をカリキュラム化してしまいがちですが、これはきわめて警戒が必要です。なぜならば、クライアントの必要に対応できない専門職は、極端に言えば国民から見れば必要とする専門職ではないからです。国民的に認められない専門職では、専門職としての意味があるとは言い難いでしょう。

また、教えるべき内容という側面では、対人援助職ということで共通する人間としての素養の問題と、それぞれの専門職が必要としている内容の、さらに二つの側面に分けることができるでしょう。特に知識（講義）系科目での学習内容については、現状で良いのか特に考えてみる必要があるでしょう。現在の教育内容で、学生達はクライアントの本当のニーズを真の意味で理解できるのでしょうか。勿論、演習や実習教育の内容についてもさらなる改善が必要な点も少なくないでしょう。

最後に、どう学ばせるかも考えなければなりません。最近の様々な高等教育批判の一つは、学んだ内容が実務で役に立たないという批判です。なぜこういう批判を受けるのでしょうか。その一つの理由は、学んだ内容を日常生活で応用できるように、学ばせていないからではないでしょうか。ひたすら、何にどう役立つのか、しかとは分からない、ピンとこない、概念や単語を教え込まれても、とりあえず試験まで覚えておいて、後は忘れてしまうこととなります。こんな不毛な努力が学習なら、学習を好きになるはずがありません。その意味では、たとえ学ぶ内容が少なくても、学んだ内容はしっかり応用できるような学び方をさせなければなりません。取り敢えず、実践で何が必要なのかを考えると、その必要とはクライアントの必要である点もしっかりと確認したうえで、それらの内容をどう学ばせるのかについても考えなければなりません。

○「教育」の専門家としての役割を果たす、極める・・・。

本学会では、これらの三つの側面のうち、どう教えるのか、どう学ばせるのかという側面、また対人援助職として共通する素養という面では、それなりの取り組みをしてきたと考えていますが、専門職である社会福祉士養成教育の内容検討という意味では、まだ本格的な取り組みをしてきたとは言えないでしょう。なお、その際に介護や保育に関する専門職養成についても無視はできないでしょうし、看護系や教員養成系や心理系などの対人援助専門職養成の動向にも配慮が必要だろうと考えています。

また、知識(講義)系の科目の教育内容や方法が現状に近いとすれば、概念を講義する教員は、今後大幅に減るだろうと考えています。なぜならば、そういう内容は、本を読めばよいし、それでもうまく理解できなければ、Web経由で流れているその専門家の映像等で学ばばよいからです。とすれば、今後の教員は、どう学ばせ方ができなければならぬかも知って、教員自身が変わっていかないと研究者としては生き残っても教員としては生き残れないということになります。求められている研究者数はそう多くはありませんから、多くは教員として生きるしかないでしょう。とすれば、単に自分の研究成果を伝承するだけでは教員にはなれないとしたら、教員としての学習のさせ方ができる専門家としての教員にならなければなりません。その意味でも、この学会の果たす役割は大変大きなものがあると考えています。

○教育課程検討の方法

社会福祉士の養成課程を検討する場合、要約して言ってしまえば、今までは到達目標を分類し、そこでの必要項目を学習すべき内容の項目として整理するという方法が取られていました。こういう検討方法についても教育学では色々と方法が開発されています。

いずれにせよ、何ができなければならないか(実生活や職務実践に応用できるということ)、何(どういう概念枠組み・言語)を理解していなければならないか、を分類するという事です。

これについては、近年、実習教育の達成課題(評価表)の整理など、社会福祉士養成教育の分野でも一定の前進を遂げつつあります。また、極めて雑駁なものとしては、厚生労働省が示している社会福祉士養成教育の基準表も、目標分類と言えないことはありません。

この、養成目標からダウンさせて教育すべき項目をまとめるという方法の欠点は、知識項目の羅列になりやすいということでしょう。従って、使えるようにするよりは、覚えさせるとなってしまうと有効な成果を上げにくい教育構造になっています。このように、対人援助専門職の養成は、たんに知識面だけの修得項目を並べても、うまくいきません。なぜならば、統合的実践に向けて知識と「技術」が統合されなければならないからです。

つまりは、目標分類だけでは、構造化された学習過程で形成的評価を行いながら学生の学習を支援していくための達成課題の整理としては不十分です。また、シラバス研究や、指導案の研究も一定の成果が報告されていますが、学生の学習支援や、教育課程全体の検討という意味では、もうひとつ隔靴搔痒の感があります。それは、個別のシラバス研究を一つのマトリックスにまとめ上げる方法が明確にならなかったからだとも言えます。また、発達段階を無視した指導案も一つの参考にはなり得ても、実際使うにはそれなりの学生向け翻訳が必要であり、その翻訳方法がもう一つ明確にならなかったという点もあるでしょう。

従って、現状の問題点を探り、新たな課題と統合していくには、新たな方法も取り入れていく必要があるでしょう。その一つは、中央教育審議会大学分科会大学教育部会の「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)(平成24年3月26日)の中で紹介している『ループリック』(10年ほど前から関係者間では使われていたのだが、最近注目されるようになってきた。)という方法だろうと考えています。この手法は、本会の監事を務めてくださっている福山和女会員と田中千枝子会員が責任編集を担当された『新 医療ソーシャルワーク実習』の中でも応用されています。

このループリックという課題整理の方法は、学習の発達段階を表にしたものであり、当該科目(テーマ)全体の段階を整理した「**全体的なループリック**」と、当該科目の内容(達成目標の側面)を観点として整理

したうえで、その観点別の発達段階を整理したグリッドで表現される「観点別のルーブリック」の二つに分けられます。また、このルーブリックは、**学習の発達段階《パフォーマンス評価・使えるかどうかの評価》を質的に評価する方法として用いられる**ので、「社会福祉士としての力量を身につけられているか」といった質的な側面での評価を求められる場面では、大変有効である。また、先にも述べたように、学習の発達目標が極めて細かく表示されるため、**個々の学生が何につまずいているのかも分析しやすく**（見方によっては、自己評価も可能）、個別学生の学習支援にとっても有効であると考えられます。

従来の社会福祉士養成課程の研究でも、達成課題の分類まではだいぶ進んできていますが、その達成課題は実践能力として必要であるとしても、現実学生の状況とはかけ離れたものである場合もあるなど、現実の教育場面に落とし込むには無理があるものも少なくないと考えられます。しかし、発達段階を織り込んだルーブリックを、各科目で作成するなど（個別のルーブリックが完成した時点で、共通事項を整理するなどして全体の体系の見直しも可能になる）養成体系の組み込むことができれば、教育目標は内容研究を大幅に前に進める事が出来るでしょう。また、そうすることによって、個別学生の指導への指標が得られ、学生の学習支援にも新たな段階に進めることもできます。また、ルーブリックは一つの評価指標ですから、学会バージョンでそれなりのものをまとめることができれば、これで絶対評価の客観的根拠が明確になります。現在は各教科の評価基準は各教員の判断に任される絶対評価ですので、評価自体が信用されないという弊害を招いていましたが、**準拠基準をそのまま使うかどうかは別にして、一つの標準が整理されることには大きな意味がある**でしょう。

また、この検討の過程で、当然のことながら現在の社会福祉士養成課程の基準が、現実の現場実践に対応するものかどうかとも問われてくるでしょう。しかし、その為には、この学会が研究上作成するルーブリックが現場実践から見てどうなのかを、**現場実践サイドからも検討**してもらう必要があります。そのために、本学会としては、関連団体との連携を強化する現実的必要性も出てきています。

○具体的な展開計画

このプロジェクトの展開予定は、概ね以下のようなスケジュールを想定しています。

2012年12月まで、研究メンバーの構成・編成

2013年3月まで、ルーブリックなどによる、教育課程の展開方法の理解と検討。

・・2020年代の福祉課題に関する整理・・

2013年8月まで、幾つかのカテゴリーでの科目別教育内容（ルーブリック）の試案作成。

2013年8月31日～9月1日・大会で内容検討

2013年12月まで、8月までの間に合わなかった科目別教育内容（ルーブリック）の試案作成

・・先行する科目別教育内容に関して実践現場の皆さんの声を聞く。

2014年3月まで、養成課程全体の教育課程試案の原案作成

2014年8月まで、会員に寄る原案の検討。《試行的授業実践などを含む》

2014年《大会》・・全体の試案としての内容まとめ。

2015年3月まで、全体の試案（JSSWEバージョン）の確定

○共同研究者の募集

本学会では、会長を代表として、この研究のための特別プロジェクト〈当面のお世話係としては杉山副会長、志水理事、宮嶋理事〉を立ち上げることになりました。関心のある方は、ぜひ連絡をしてください。

連絡先・・大妻女子大学 川延研究室・・042-339-0035(FAX兼用)

Jsswe4t@yahoo.co.jp 又は、 m-kawatei@otsuma.ac.jp

第3回春季研究集会のお知らせ

詳細はまだ未定ですが、日程と会場は以下の通りです。お忙しいとは思いますが日程を確保しておいてくださるようお願い申し上げます。

日時・2013年2月24日(日) 午前10時から午後4時半まで

会場・大妻女子大学 千代田校舎(東京都千代田区三番町)

内容・教育課程検討の方法と課題(ルーブリック評価法など)

第9回大会のお知らせ

詳細は次号のニューズレターなどでお知らせしますが、概要は以下の通りですので、日程を確保しておいてください。

日時・2013年8月31日(土)～9月1日(日)

会場・東京都多摩市内の企業内研修施設(然るべきホテルのシングル並みの宿泊施設とセットになっています。)

テーマ(仮)・社会福祉士養成課程の改正について検証する(2)

——新たな養成課程に向けて、現状をどう改善するか——

4. 日本社会福祉教育学会 2012年度 第2回理事会報告

日時: 2011年8月24日(金) 13:00～17:00

会場: 大妻女子大学千代田校舎 A棟 357ゼミ室

出席: 川廷会長、杉山理事、川上理事、小山理事、高橋理事、志水理事、保正理事、宮嶋理事、横山理事、福山監事、寫末(事務局)

欠席: 長崎理事、岡本監事、小嶋事務局長

議事次第

会長挨拶

1. 2011年度活動報告案(第1号議案)

2. 2011年度決算報告案(第2号議案)

3. 監査報告(第3号議案)

4. 2012年度補正活動計画案(第4号議案)

5. 2012年度補正予算案(第5号議案)

6. 2013年度事業計画案(第6号議案)

7. 2013年度予算案(第7号議案)

8. 入退会関連 ※下記参照

9. 第8回大会準備状況報告

10. その他 2012年度後半以降の活動について

11. 総会の運営について 議事進行: 小山理事 議長: 白川 充(仙台白百合女子大学)

12. 次回理事会の開催について 11月11日(日)予定(⇒その後、「理事懇談会」に変更となる)

副会長挨拶

入退会関連

1) 入会審査 下記3人の入会を承認した。

275 新藤こずえ(立正大学) 276 野村裕美(同志社大学) 277 宮元預羽(大妻女子大学)

2) 退会承認 下記1人の退会を承認した。

54 竹並正宏

5. 日本社会福祉教育学会 2012年度 総会報告(決議書)

日時 2012年8月25日(土) 17:00~18:00
会場 立正大学大崎校舎 511 教室

次第

進行：小山理事

会長挨拶

議長選出 白川 充(仙台白百合女子大学)

出席会員数 28人

議事 第1号議案から第7号議案まで全て採択された。

1. 2011年度事業報告案(第1号議案)
2. 2011年度決算報告案(第2号議案)
3. 2011年度監査報告(第3号議案)
4. 2012年度補正活動計画案(第4号議案)
5. 2012年度補正予算案(第5号議案)
6. 2013年度事業計画案(第6号議案)
7. 2013年度予算案(第7号議案)
8. 次回大会関連報告

執行部

会長 川廷宗之

副会長 杉山克己

理事 川上富雄、小山 隆、志水 幸、高橋信行、長崎和則、保正友子、宮嶋 淳、横山豊治

監事 岡本民夫、福山和女

事務局担当理事 小嶋章吾 事務局 畷末憲子

第1号議案 2011年度 事業報告

1. 役員選挙(事務局)

詳細は、NLNo.11(2011年11月11日付発行)にて報告済み。

2. 第7回大会及び2011年度総会(杉山)

テーマ：職業人としての社会福祉教育の課題～ソーシャルワーク教育再考～

日時：2011年8月27・28日(土・日)

会場：青森県立保健大学 参加者：49人

内容：招待講演：高校福祉科における職業人養成教育～大学へのメッセージ～

高橋福太郎(全国福祉高等学校長会 会長)

シンポジウムⅠ：大学での社会福祉教育における職業人養成教育

岡多枝子(日本福祉大学)・矢幅清司(文部科学省)・高橋信行(鹿児島国際大学)

コーディネーター：柿本誠(日本福祉大学)

シンポジウムⅡ：改めてソーシャルワーク教育と社会福祉士養成教育の関係を問う

秋山智久(昭和女子大学)・白澤政和(桜美林大学)・米本秀仁(北星学園大学)

コーディネーター：小山隆(同志社大学)

自由研究報告/課題別自由分科会/2011年度総会

3. 理事会(事務局)

第1回 2011年5月22日、東洋大学白山キャンパス

入会審査/役員選挙/第7回大会/宿題研究/学会誌第6号/学会誌査読委員/

NL/震災対応シンポ/その他(役員改選後の新理事には年度内の理事会に出席を依頼)

第2回 2011年8月26日、青森市民ホール

役員選挙結果/規約改正/総会議案/第7回大会/入会審査/委員会活動

第3回 2011年10月8日、淑徳大学

入会審査／総会決議の確認／当学会の当面する課題／当面の事務対応／第7回大会報告

第4回 2012年3月4日、大妻女子大学千代田キャンパス

第2回春季研究集会／第8回大会／学会誌第6号／NL／学会指定研究3／HPリニューアル
課題研究の名称について（宿題研究を学会指定研究に、課題研究を会員自主企画研究に改称した。）

4. 第2回春季研究集会（志水）

共催：日本社会福祉士養成校協会関東甲信越ブロック（教員研修会として）

日本社会福祉教育学校連盟関東甲信越ブロック（教員研修会として）

テーマ：社会福祉教育研究の多様性と共通基盤をめぐって

日時：2012年3月5日（月）10:30～16:00

会場：大妻女子大学千代田キャンパス

参加者：36人

内容：第1部 基調講演：社会福祉教育研究の回顧と展望

～福祉系学会における教育研究と専門職養成教育の課題～

米本秀仁（北星学園大学） コメンテーター：川廷宗之（大妻女子大学）

第2部 シンポジウム：社会福祉教育研究の多様性と共通基盤をめぐって

コーディネーター：志水幸（北海道医療大学）

専門職養成教育の理想と現実：宮嶋 淳（中部学院大学）

学部教育の到達水準とコア・カリキュラム：杉山克己（青森県立保健大学）

専門職養成教育とコア・カリキュラム：白川 充（仙台白百合女子大学）

コメンテーター：米本秀仁（北星学園大学）

5. 課題研究（小山）

・宿題研究

	テーマ	担当理事	研究期間（予定）	備考
1	専門基礎研究	川廷、杉山	2009～2011年度	学会誌第7号で報告予定
2	職業人養成教育	高橋	2010～2012年度	最終年度
3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度	継続2年目
4	歴史研究	川上、志水、横山	2011～2013年度	継続2年目

6. 学会誌（杉山・高橋）

2012年3月 第6号発行

7. ニュースレター（保正、横山、宮嶋）

No.9 2011年4月／No.10 2011年7月／No.11 2011年11月／No.12 2012年1月

8. 渉外活動（川上）

日本福祉系学会連合会に参加した

9. 会員状況（事務局）

217人（2012年3月31日現在）

新入会員 21人

退会者 30人（本来は12名）

うち23人は、規約第8条の2にもとづき「退会したものとみなす」扱いとなったもの。

さらに、うち18人は、2010年度末で退会扱いとなる予定であったが、選挙人・被選挙人確定のため、2011年度中の退会扱いとなったもの。

<参考>	退会申し出者	自動退会者	合計
2009年度まで			18人
2010年度	11人	18人	29人（うち本来2009年度自動退会者16人）
2011年度	7人	5人	12人
		計	59人

第2号議案 2011年度 決算報告

(2011.4.1～2012.3.31)

収入の部

収入費目	当初予算①	補正予算②	決算③	差額③-②	備考
a 会費	1,500,000	1,500,000	699,000	-801,000	予算比 46.6% 当年度分: 85人
b 研究集会		40,000	36,000	-4,000	第2回春季: 36人参加
c 共催費		200,000	370,000	170,000	社養協・学校連盟関ブロ より研究集会の共催費
d 雑収入	1,000	1,000	253,827	252,827	大会寄付 252,173円 学会誌販売 1,580円 利息 74円
e 前年度繰越	500,000	849,131	849,131	0	
収入 合計	2,001,000	2,590,131	2,207,958	-382,173	

支出の部

支出費目	当初予算④	補正予算⑤	決算⑥	差額⑥-⑤	備考
A 大会助成費	300,000	400,000	732,559	332,559	第7・8回の2回分
B 研究集会費	100,000	300,000	166,863	-133,137	
C 学会誌発行費	300,000	600,000	332,840	-267,160	春季研究集会報告含む1 回発行(前年度同様、年 度末発行により翌年度分 へ)
D 課題研究費	300,000	340,000	3,430	-336,570	宿題研究1～4は遂行中
E 理事会費	250,000	250,000	212,889	-37,111	4回開催
F 事務費	250,000	260,000	242,909	-17,091	NL4回発行、事務局費
G HP・PR費	30,000	20,000	10,710	-9,290	
H 選挙費	10,000	25,000	34,194	9,194	
I 渉外費	40,000	70,000	21,210	-48,790	福祉系学会連合会費等
J 予備費	421,000	325,131	0	-325,131	
小計	2,001,000	2,590,131	1,757,604	-832,527	
K 年度繰越		0	450,354	450,354	
支出 合計	2,001,000	2,590,131	2,207,958	-382,173	

第3号議案 2011年度 監査報告

監査報告書

1. 監査事項

日本社会福祉教育学会 2011年度事業報告書及び会計収支決算報告について

2. 監査報告

上記事項を監査した結果、事業は適切に実施され、また会計収支決算についても、必要書類などの精査により適切に遂行されていることを確認し、ここに監査結果を報告致します。

2012年8月20日 監事 岡本民夫

2012年8月23日 監事 福山和女

第4号議案 2012年度 補正事業計画

1. 理事会（事務局）

- 2012年度第1回 2012年5月20日（日）14:00～17:00、大妻女子大学千代田校舎
 2012年度第2回 2012年8月24日（金）13:00～17:30、大妻女子大学千代田校舎
 2012年度第3回 社会福祉教育セミナー時 2012年11月11日（日）12:30～13:30（その後「理事懇談会」に変更）
 2012年度第4回 第3回春季研究集会時 2013年2月23日（土） 14:00～18:00

2. 第8回大会及び2012年度総会（保正）

- テーマ：社会福祉士養成教育課程の改正について検証する（1）
 ー完成年次を迎えてどのように評価するのか
 日時：2012年8月25・26日（土・日）
 会場：立正大学 大崎校舎
 内容：ワークショップ1：「実習教授法について」：川上富雄（駒澤大学）
 ワorkshop2：「演習教授法について」：杉野聖子（江戸川大学総合福祉専門学校）
 記念講演 「社会福祉士養成課程改正についての指定科目外担当からの評価」
 加藤博史（龍谷大学）
 基調講演「社会福祉士養成課程改正の経緯と現状」：白澤政和（桜美林大学大学院）
 シンポジウム「社会福祉士養成課程の改正について検証する（1）」
 ー完成年次を迎えてどのように評価するのかー
 渡辺裕一（武蔵野大学）・綿祐二（文京学院大学）・守本友美（皇學館大学）
 コーディネーター：小山隆（同志社大学）
 自由研究発表／ランプセッション（社福士養成課程改正のアンケート）／2012年度総会

3. 第3回春季研究集会（志水）

- テーマ：社会福祉教育研究におけるルーブリックの活用（仮）
 日時：2013年2月24日（日） 10:00～17:00
 会場：大妻女子大学 千代田校舎

4. 課題研究（小山）

・学会指定研究

	テーマ	担当理事	研究期間（予定）	備考
2	職業人養成教育	高橋	2010～2012年度	最終年度
3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度	継続2年目
4	歴史研究	川上、志水、横山	2011～2013年度	継続2年目
5	教育評価	宮嶋、杉山	2012～2014年度	初年度

日本社会福祉教育学会における課題研究

<ul style="list-style-type: none"> ・学会指定研究 理事会がテーマを決めて3年程度のサイクルでまとめていく研究。研究補助は3年間で30万円を予定。 ・会員自主企画研究 理事会承認のもとで行われる会員による共同研究。研究補助は単年度で10万円程度を予定。

5. 特別研究プロジェクト（会長）

- ・社会福祉士養成教育のルーブリック作成研究
- ・社会福祉士養成課程全体に関する研究を進めるプロジェクトを立ち上げる

6. 学会誌の発行計画（杉山・高橋）

- 第7号（2012年9月以降発行予定）
 ・特集論文（学会指定研究1報告） ・第2回春季研究委集会報告
 第8号（年度内発行予定）
 ・第8回大会報告 ・特集論文、原著論文、教育実践報告

7. ニュースレター発行計画（宮嶋・横山）

No.13（2012年4月）巻頭言（杉山）発行済

No.14（2012年8月）巻頭言（長崎）発行済

No.15（2012年10月）巻頭言（川上）

No.16（2013年1月）巻頭言（志水）

8. 渉外活動（川上）

①関連学会との連携強化

②学術会議への団体登録

9. 社会貢献事業（会長）

①専門的応援教員人材バンク

②関連文献センター

10. 組織強化

①HP：<http://jsswe.org/>（長崎）事務局メールアドレス：info@jsswe.org

②MMの準備体制整備（長崎）

③会員拡大：リーフレットの普及（事務局）

第5号議案 2012年度 補正予算

(2012. 4. 1～2013. 3. 31)

収入の部(2012年8月15日現在)

収入費目	当初予算①	執行状況	補正予算案②	差額②-①	備考
a 会費	1,500,000	1,603,000	1,856,000	356,000	【当初予算】 年会費 8,000 円×200 人×0.9 入会費 3,000 円×20 人 【執行状況】 過年度分：68 人 当年度分：143 人 次年度分：2 人 【補正予算案】356,000 円 年会費 8,000 円×37 人=296,000 円 入会費 3,000 円×20 人=60,000 円
b 研究集会	50,000	0	50,000	0	参加費 1,000 円×50 人
c 共催費	200,000	0	370,000	170,000	社養協・学校連盟関ブロより
d 雑収入	10,000	18	10,000	0	利息等
e 前年度繰越	491,000	450,354	450,354	-40,646	
収入 合計	2,251,000	2,053,372	2,736,354	485,354	

支出の部(2012年8月15日現在)

支出費目(案)	当初予算①	中間決算	補正予算案②	差額②-①	
A 大会助成費	300,000	0	300,000	0	第9回大会
B 研究集会費	250,000	37,409	370,000	120,000	
C 学会誌発行費	500,000	255,727	500,000	0	春季研究集会報告含む 2回発行：年度末分は2013年度へ
D 課題研究費	350,000	100,420	350,000	0	学会指定研究3
L 特別研究費			200,000	200,000	ループリック調査研究費
E 理事会費	250,000	176,778	250,000	0	

F 事務費	230,000	98,436	230,000	0	NL4回発行、事務局費等
G HP・PR費	50,000	0	50,000	0	
H 選挙費	0	0	0	0	
I 渉外費	40,000	0	40,000	0	福祉系学会連合会費等
J 予備費	281,000	0	331,000	50,000	
小計	2,251,000	668,770	2,621,000	370,000	
K 年度繰越	0	0	115,354	115,354	繰越見込み額
支出 合計	2,251,000	668,770	2,736,354	485,354	

第6号議案 2013年度 事業計画

1. 大会・総会（会長）

第9回（2013年度）大会

テーマ：社会福祉士養成教育課程の改正について検証する（2）

日 時：2013年8月31～9月1日（土・日）

会 場：関東の研修施設

主 管：大妻女子大学（但し大学を会場とはせず、合宿方式で行う）

2. 理事会（事務局）

2013年度第1回 社養協総会時

2013年度第2回 第9回大会時

2013年度第3回 社会福祉学会時

2013年度第4回 春季研究集会時

3. 第4回春季研究集会（志水）

検討中

4. 課題研究（小山）

・学会指定研究

No.	テーマ	担当理事	研究期間（予定）	備考
3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度	最終年度
4	歴史研究	川上、志水、横山	2011～2013年度	最終年度
5	教育評価	宮嶋、杉山	2012～2014年度	継続2年目
6	I Tを活用した教育	長崎、川廷	2013～2015年度	2013年度開始

5. 特別研究プロジェクト（会長）

・社会福祉士養成教育のルーブリック作成研究

・社会福祉士養成課程全体に関する研究の一環として、プロジェクトを進める。

6. 学会誌（杉山・高橋）

第9号（2013年7月以降発行予定）

・特集論文（学会指定研究2報告） ・第3回春季研究委集会報告 ・原著論文、教育実践報告

第10号（2014年1月以降発行予定）

・第9回大会報告 ・特集論文、原著論文、教育実践報告

7. ニュースレター（宮嶋・横山）

No.17（2013年4月）、No.18（2013年7月）、No.19（2013年10月）、No.20（2014年1月）

8. 渉外活動（川上）

①関連学会との連携強化 ②学術会議への団体登録

9. 社会貢献事業（会長）

①専門的応援教員人材バンク ②関連文献センター

10. 組織強化

- ①HPの充実（長崎） ②MMの発行（長崎）
 ③会員拡大：リーフレットの普及（事務局）

第7号議案 2013年度予算

(2013. 4. 1～2014. 3. 31)

収入の部

収入費目	2012年度 補正予算案①	2013年度 予算案②	差額②-①	備考
a 会費	1,856,000	1,792,000	-64,000	年会費:8,000円×235人×0.9 =1,692,000 円 入会費:3,000円×20人=60,000円 過年度分会費:8,000円×5人= 40,000円
b 研究集会	50,000	50,000	0	
c 共催費	370,000	200,000	-170,000	社養協・学校連盟関ブロと協議中
d 雑収入	10,000	10,000	0	
e 前年度繰越	450,354	350,000	-100,354	
計	2,736,354	2,402,000	-334,354	

支出の部

支出費目	2012年度補正 予算案	2013年度予 算案	差額②-①	備考
A 大会助成費	300,000	300,000	0	
B 研究集会費	370,000	200,000	-170,000	
C 学会誌発行費	500,000	500,000	0	春季研究集会報告含む 2回発行:年度末分は2013年度へ
D 課題研究費	350,000	300,000	-50,000	
L 特別研究費	200,000	150,000	-50,000	
E 理事会費	250,000	250,000	0	4回開催
F 事務費	230,000	230,000	0	NL4回発行、事務局費等
G HP・PR費	50,000	20,000	-30,000	
H 選挙費	0	0	0	
I 渉外費	40,000	20,000	-20,000	福祉系学会連合会費等
J 予備費	331,000	320,000	-11,000	
小計	2,621,000	2,290,000	-331,000	
K 年度繰越	115,354	112,000	-3,354	
支出 合計	2,736,354	2,402,000	-334,354	

6. 学会探訪④：日本福祉のまちづくり学会

～震災を契機に始まった学際的な研究交流～

横山豊治（新潟医療福祉大学）

1. 「日本福祉のまちづくり学会」の概要

「福祉のまちづくり学会」と聞くと、社会福祉関係者の中には、各地の社協職員らの中核にしたような地域福祉系の学会をイメージする向きも少なくないと思われるが、これは主に工学系と福祉系の研究者・技術者・行政関係者らが交わる学際的な学会である。

1995年の阪神・淡路大震災の復興支援活動を契機に準備が始まり、全国的な福祉のまちづくり活動の連携と学術研究を目的として1999年に設立された「福祉のまちづくり研究会」が母体になっている。

2011年には法人化され、「一般社団法人日本福祉のまちづくり学会」となった。

現在の会長は東洋大学ライフデザイン学部の高橋儀平氏で、北星学園大学の秋山哲男氏、日本女子大学の小山聡子氏ら4名の副会長、5人の理事、全国7支部の支部長を含めた36人の代議員らで運営されている。

法人化したこともあり、社員総会は全国大会とは別に日程を設けて行なわれるようになっており、2012年度は6月23日（土）に東洋大学白山キャンパスで開催。今年度予算上の会員数は750人。設立15年目の学会ながら、既に3名が名誉会員となっている。（一番ヶ瀬康子・澤村誠志・野村歓の3氏）

全国大会は例年、夏季に行なわれており、第15回目となった今年は奇しくも、当学会と同じ8月25日（土）・26日（日）に、北九州市で開催され、そのテーマは「リハビリテーション発祥の地“北九州”からひとにやさしいまちづくりの提言－「産業」「福祉」「環境」のこれから－」であった。

学会誌である『福祉のまちづくり研究』は年3回発行されている。

総務委員会、会誌委員会、論文委員会という常設の委員会の他に、学術研究委員会の中にテーマ別の特別委員会が設置されており（法制度特別研究委員会・情報障害特別研究委員会・福祉交通サービス特別研究委員会・子育て子育てからまちづくり特別研究委員会・災害復興特別委員会・学会賞選考委員会）、この学会内の研究プロジェクトとしてどのような課題に組織的に取り組んでいるかがわかる。特に、2011年の東日本大震災以後は、被災地の復興調査活動とその報告会を実施した他、2012年1月には、災害復興特別委員会と情報障害特別研究委員会の合同によるシンポジウム「東日本大震災から考える視覚障害者が安心して暮らせるまちづくり」を開催したり、関西支部において「被災者の生活再建と復興まちづくり～阪神・淡路の経験を東北に活かすために～」と題するセミナーを開催したりと、災害復興関連の活動が盛んに行なわれている。

2012年度には、学会による公募型の東日本大震災復興支援活動助成事業として、次の4件に対して20万円ずつが助成されている。

日本福祉のまちづくり学会 東日本大震災復興支援活動助成事業

1	仮説住宅高齢者生きがいづくり、孤立化の予防
2	大船渡被災地障害者支援センターおおふなどの事務所建設計画支援
3	福祉型仮設住宅の整備要件調査
4	乳幼児の適切な保育環境についての具体的な支援（建物、避難経路、遊具、乳幼児親子の保護など）

2. 学会の特色

この学会の特色として、多彩な会員構成が挙げられる。大学工学部、工業大学、工科大学、芸術大学などに所属する会員が多いので、土木・建築・交通・ITなど工学系の研究者や技術者が多いという印象はあるが、バリアフリーやユニバーサルデザイン、アクセシビリティなどに関心が向けられる学会なので、障害者福祉分野を中心とした社会福祉系の研究者や、特別支援教育関係者、リハビリテーション専門医、理学療法士、作業療法士、福祉住環境コーディネーターらの参加も活発である。福祉機器やIT関係などの企業に所属する会員も多いが、同学会には賛助会員と別に法人会員制度もあり、2012年度現在で19の企業・団体が法人会員となっている。その中には、大手鉄道会社、自動車メーカー、ホテル、陶器メーカーと並んで医療法人、社会福祉法人、NPO法人もあるが、世田谷区役所や練馬区役所といった地方自治体も含まれている。

全国大会における口頭発表の分科会（セッション）の区分を一覧すると、扱う課題の幅広さがわかる。中には「観光」をテーマとするセッションもあり、会場では「異業種交流会」にも似た様相を呈する場面も見

られるが、「福祉のまちづくり」の理念や具体的方法を社会に広げていくための人材育成（研修）や、障害学生への学習支援、学校のインクルーシブ環境など、教育に関わるテーマも扱っている。

全国大会のメインプログラムは2日間行なわれるが、「3日目」に希望者による現地視察・見学会が組み入れられ、開催地のバリアフリー、ユニバーサルデザイン等の実情を見て回るツアーが恒例化しているのも、この学会の特徴である。

全国大会・口頭発表の分科会一覧（第15回大会開催案内におけるセッション名より）

まちづくり①（視覚障害者誘導他）	まちづくり②（トイレ他）	まちづくり③（UD他）
交通①（交通手段）	交通②（公共交通）	福祉機器
教育①（福祉のまちづくり教育）	教育②（学習支援）	案内・誘導・情報
建築・住環境①（住宅政策）	建築・住環境②（温熱環境他）	建築・住環境③（手すり・浴室）
建築・住環境④（福祉施設設計他）	建築・住環境⑤（建築設計他）	建築・住環境⑥（居住環境）
移動・外出①（視覚障害者支援）	移動・外出②（公共トイレ他）	移動・外出③（BF・UD他）
移動・外出④（外出）	地域社会①（買い物・地域課題）	地域社会②（高齢者支援）
地域社会③（地域支援）	観光①（モニターツアー・住民参加）	観光②（マップ他）
協働・職能・健康づくり・他	防犯・防災	

（UD＝ユニバーサルデザイン、BF＝バリアフリー）

3. 新潟での全国大会に携わって

4年前の2008年には、新潟市で第11回全国大会が開催され、筆者もその実行委員として企画・準備・運営の一端に関わり、当日も「教育・人材育成」関連の分科会の座長を担当した。

「いつものもてなし、こちよ交流～誰もがくらしやすく訪れたいまちを目指して～」という大会テーマのもと、県内最大のコンベンション施設を会場にして盛大に催され、開会時には新潟市長が出席し、市民を代表して参加者への歓迎の挨拶を述べた。

この時の口頭発表では27の分科会が設けられ、計136演題の発表が行なわれた。

いわゆる名称後援には、内閣府、文部科学省、厚生労働省の他、経済産業省、国土交通省、新潟県、新潟市、新潟県社協、新潟市社協、地元新聞社、地元テレビ局（全5局）など、多くの協力を得たが、特に新潟県産業労働観光部と新潟市政策企画部（部署名はいずれも当時のもの）を中心とした県市の行政当局には、実務の上でもかなり中核的な役割を果たしてもらったことができた。

実行委員長として多くの関係者のまとめ役を務めたのは、新潟大学工学部福祉人間工学科の林豊彦教授であり、同氏とともにかねてからローカルで学際的な研究会（「にいがた自立生活研究会」）をともに運営していた縁で筆者にも（特に工学や障害者福祉が専門でないにもかかわらず）協力を求められ、実はこの大会のために学会に入会して参画したという経緯がある。

それまで会員でもなかった開催地の行政関係者が、業務の一環として大会準備の実務に奔走してくれて、毎回の実行委員会も県庁の会議室で行なえる学会…というのも初めての経験だったので、「こういう学会もあるのか」と新鮮に感じたものである。ちなみに、新潟大会の「3日目」のプログラムは、当時、中越地震から4年近く経っていた旧・山古志村（現長岡市）方面の現地視察であった。

来年、2013年度の全国大会は8月30（土）～9月1日（月）に仙台市・東北福祉大学で開催する方向で調整中とのことなので、震災からの復興状況の検証はもとより、被災地とその周辺での「福祉のまちづくり」のあり方が議論されることであろう。

7. メールマガジンのお知らせ

当学会のメールマガジンができました。

「日本社会福祉教育学会」「メルマガ」で検索していただくと、「メルマ！事務局」の登録のための画面がわかります。登録をしていただくと、「メルマ！」からオフィシャルメルマガが無料で届くこととなります。

当学会での情報伝達手段の1つに加わりましたので、お知らせいたします。

8. 会員の声～私の福祉教育～

社会福祉教育実践を振り返って

塩満 卓（佛教大学福祉教育開発センター）

教員として現所属に転職して7年目である。振り返ってみると、教えることが下手な自分と向き合い、試行錯誤の連続であったように思う。転職するまでの筆者は、精神科病院や保健所、精神保健福祉センターといった精神保健福祉の実践現場で21年間、走り回っていた。変化していく当事者、変化していく街、そういった変化を創り出していくソーシャルワーカーとしての仕事のおもしろさや、やり甲斐を感じていた。

現所属からお誘いを受けた時に、随分と長い葛藤があった。そして教員とは、福祉の担い手を養成していく社会的意義とその責任を伴う仕事であり、現場のソーシャルワーカーの社会的使命に通底する重要な教育者であると考え、転職を決意した。

にも関わらず、筆者の教育実践は、失敗の連続であった。なぜか。様々な理由が思い当たるが、最も大きな原因は、「双方向性」に欠ける授業であったからだ。「人間は経験した世界のなかでしか考えられない」という鉄則を無視し、筆者の「頭の中で考えていること」を「学生の経験世界」に変換することなく、そのまま伝えようとしていた。何を教えるか（What）はあるのだが、どのように教えるのか（How）の工夫に欠けていたのである。

授業を終える度に、研究室で落ち込む日々が続いた。1年で辞めようと思っていた年末に、「次年度のシラバスを書け！」と教務課から文書が来た。「心を読まれているのでは？」とも思えたが、毎年のことらしく幸いにも妄想には発展しなかった。

2年目に入り、隣の研究室に新人教員がやって来た。彼も筆者と同じように、授業に苦労していると言った。そこから、筆者は、彼とのミニFDを毎週実施するようになった。お互いが使っているレジュメを見せ合い、授業のねらい、授業展開、発問等を報告し合った。この2人だけのミニFDのお陰で、「悩んでいるのは自分だけじゃない」と思うことができ随分と救われた。また、同じレジュメでも、その時の教室の雰囲気や学生の状況により、展開は違ったものとなることも知った。

いいのか悪いのかよく分からないのだが、ソーシャルワーカーとして担当していたグループワークや講演会と授業の本質は同じではないか。と最近を感じている。つまり、それぞれの経験世界を照らし合いながら、新たな概念や価値を共有する。とでも言えようか。そういった思いで授業に臨むのであるが、シラバスどおりに進めようとするれば、一方通行の授業に陥りやすく「双方向性」は担保しがたい。学生の経験世界を引き出し「双方向性」を大切にすれば、シラバスどおりに進まない。という二律背反状態にある。

ここまで書いてきて、筆者自身が「ソーシャルワーカーとしての経験世界」から授業を再規定していることに気づいた。このように悩みの質を少しずつ変えながら、これからも試行錯誤の授業を続けていくのだと思う。教員として自己覚知の機会を与えていただいた学会NL編集委員の横山豊治先生に紙面をお借りして感謝申し上げます。

今、思うこと

田中 清（新潟青陵大学）

福祉現場に約15年間、福祉系専門学校および福祉系大学の福祉教育に携わって約15年間、ちょうど同じくらいの年月を臨床現場と教育現場で過ごしてきた。自分自身の大学時代は教員でもなるか程度の意識で教員免許を取り、採用試験を受けたが失敗…。当時その頃からボランティア活動をしていた関係でたまたま福祉の道に進んだ。今思えば、福祉に関する教員をやっているわけだから、その両方が叶ってとても幸せなのかもしれない。人生どうなるかはわからない。どの道を歩もうとも、大学で学んだり体験したことをどこかで活かしてくれればいい、いつか思い出してくれればいい、と常に思い仕事をしている。

最近、ゼミの卒業生と会う機会があり、今の仕事のことや大学時代のことなどを語り合った。その学生が話の中で「大学でいろいろな知識を学んだかもしれないが、今一番良かったと思うのは『権利擁護』や『利用者主体』といった大切な考え方にふれたことだ」

とポツリと言った。大学時代はそんなことを言う学生には見えなかったもので、正直驚いたがうれしくもあ

った。大学で理念を教えたとしても、なかなかイメージが湧かず心に落ちないのではと思っていたが、そうでもないことを知らされた。やはり大切なこと、福祉の軸となることは、若く感性豊かな時期に触れることが大事なのだろう。

私は大学授業の中で、福祉系の1年生約140名対象に相談援助の基礎にあたる科目を担当している。福祉学習の入り口として重要な科目であるし、その後の学習の軸となってもらうよう取り組んでいる。いろいろな事例や事象を引き合いに出して問題意識をもつこと、そしてそれを表現してもらうよう授業コメントを毎回出してもらっている。その中から質問や意見に対して、毎回主なものに限って回答しプリントしている。(これは、以前川延先生の実践に触れた時から自分なりに続けている取り組みである。)学生の中には、それを楽しみにしていたり、他の意見に対してまたコメントを載せたりと、紙上討論的になることもある。それらを通して「気づき」「喜び」「怒り」などを感じてもらえればと思っている。心がざわざわすること、これが福祉の出発点だと思う。

「今時の学生は…」と私たちはつい言ってしまうがちである。しかし、私たちは、学生の何をどれだけ知っているのだろうか?彼らの置かれている状況やこれまでの背景をどれだけ理解しようとしているのだろうか?どんなに学生の学力不足やコミュニケーション不足などを嘆いても始まらない。「今、ここから」学生と真摯に向き合いながらやっていくしかない。これからの福祉を担うのは彼らなのだし、いずれ支援を受けるのはわれわれなのだから、共に考え歩んでいくしかないと思う。

9. 『日本社会福祉教育学会誌』への投稿募集

学会誌の発行に向けて、会員の皆様からの積極的な投稿を募集しています。投稿原稿は随時受け付けますので、学会事務局(本紙1頁タイトル部分に表記)までご投稿願います。

投稿規程、執筆要領は、2012年3月31日付けで発行された学会誌第6号の巻末や、2011年11月11日付けで発行済みのニューズレター第11号に掲載されていますのでご参照下さい。(ニューズレターのバックナンバーは、学会のホームページでも一部閲覧可能です ⇒ <http://jsswe.org/index.html>)

投稿募集 ニューズレターでは、皆様の社会福祉教育に関する声を募集しています。奮ってご投稿下さい。

テーマ: 社会福祉教育に関することであればテーマは自由です。例えば下記のようなテーマがおすすめです。

「社会福祉士のカリキュラムについて」「実習教育について」「福祉分野に行かない学生への対応について」「教科書の使い方について」「お薦めの教材について」「科目毎の教授法について」

締め切り: 随時。ニューズレターへの掲載順はこちらにお任せ願います。

字数: 800~1,600字程度

送り先: 次回ニューズレター第16号担当理事 宮嶋 淳 宛 miyajji@chubu-gu.ac.jp

編集後記

NL第15号をお届けします。原稿をお寄せいただいた皆様ご協力ありがとうございました。今号では8月に都内で行なわれた第8回大会の様様を中心にお伝えしました。あのときの厳しい猛暑は9月半ばまで続きましたが、この頃はすっかり晩秋の寒さを感じるようになりました。季節は確実に巡り、クリスマスケーキやおせち料理の予約受付、年賀状の発売…と、年末へ向けた動きが目につくようになり、足早に追い立てられるような気持ちにさせられます。教員は年度内の学事暦に従って、常に“次の業務”へと追い立てられながら日々を送る職業ですが、それだけに今大会で掲げたようなテーマについてじっくりと地に足のついた取り組みを行なっていくことは大切といえましょう。川上富雄理事による今号の巻頭言の内容にも深い共感を覚えるだけに、一層、その思いが募ります。

(編集委員 横山)